## 一八八七年五月八日（日）

〔ナレンドラや僧院（マト）の兄弟たちの離欲――ヨーガヴァシシュタの勉強――讃神歌（キールタン）の喜びと踊り〕

校長は土曜日に来た。水曜まで、即ち五日間僧院（マト）に滞在するつもりである。今日は日曜日。在家の信者たちはたいてい、日曜日に僧院（マト）にお参りにくる。現在は主に〝ヨーガヴァシシュタ（不二一元ヴェーダーンタ哲学の書物）〟の勉強をしている。校長はタクール、聖ラーマクリシュナのところでヨーガヴァシシュタの話は少しばかり聞いていた。肉体意識（デーハ・ブッディ）があるうちにヨーガヴァシシュタで説くところのソーハムの思想（それは我なり＝梵我一如の真理）を奉持することを、タクールは禁じておられた。そして、主人と召使いの気持ちでいるのがよいのだ、とおっしゃった。校長はヨーガヴァシシュタについて、僧院（マト）の兄弟たちの考えを聞いてみるつもりである。

校長「えーと、ヨーガヴァシシュタにはブラフマン智のことを、どんなふうに説明してありますか？」

ラカール「飢え、渇き、喜び、悲しみ、こういうものすべてマーヤーである！　心を絶滅することが悟りへの手段である、と――」

校長「心を滅した後に在るもの、それがブラフマンです。違いますか？」

ラカール「そうです」

校長「タクールはそうおっしゃった。ナングタがタクールにそう言われたのです。それはそうと、

この本にはヴァシシュタがラーマに在家の生活をせよ、と説得した話(ことば)が書いてありますか？」

ラカール「いえ、まだそこまでは――。ラーマがアヴァターラだということさえ認めていません」

こんな対話をしていると、そこへナレンドラとターラクともう一人の信者がガンガーの岸から戻ってきた。彼らはコンナガルに行くつもりだったのだが、渡し舟が見つからなかったのだ。彼らは部屋に入ってきて坐った。ヨーガヴァシシュタの話はつづく。

ナレンドラ「（校長に）良い話が沢山のっています。リーラーの話はご存知ですか？」

校長「ええ、ヨーガヴァシシュタにありますね。あちこち読んではいます。リーラーはブラフマン智に達していたのですね？」

ナレンドラ「はい。それから、インドラとアハリヤーの話は？　それから、ヴィドゥラータ王が賤民(チャンダーラ)になった話は？」

校長「ああ、思い出しました」

ナレンドラ「森の描写がすばらしいですね」(原典註)

〔僧院(マト)の兄弟たちの日々の沐浴と師への礼拝〕

ナレンドラたちがガンガーの沐浴に行く。校長も同行するつもりである。強い日射しを見て、校長は傘を持って行く。バラナゴルに住んでいるシャラト・チャンドラ氏もいっしょに来た。この人は厳格な在家バラモンの青年である。始終僧院(マト)に出入りしている。数日前に世俗の生活を放棄して、聖地

を巡礼している。

校長「(シャラトに向かって)ひどい日射しですねえ!」

ナレンドラ「だから傘を持ってきたんでしょう」(校長笑う)

信者たちは首にタオルをかけて、僧院(マト)から道路づたいにパラマーニク・ガートのもう一つ北のガートへ行って沐浴をした。僧院(マト)の人たちは黄衣(ゲルア)を着ていた。今日はボイシャク月二十六日。酷烈な日射しだ。

校長「(ナレンドラに)日射病になりそうな暑さだね!」

ナレンドラ「あなた方は肉体(からだ)が離欲の妨害になるんですね、そうじゃありませんか? あなたもデベンドラさんの場合も――」

校長は笑った。そして、〝肉体だけだろうか? じゃまになるのは〟と思った。

沐浴をすませると信者たちは僧院(マト)に帰り、足を洗ってから、タクール、聖ラーマクリシュナの部屋に入った。タクールにごあいさつしてから、一人、一人、タクールの足もとに花を捧げた。

礼拝室へ入るとき、ナレンドラが少し遅れてきた。グル・マハーラージ(タクールのこと)を拝してから花をとろうとすると、花盆の上にはもう花がなくなっていた。彼は、〝あ、花がない〟と声をあげた。花盆の上には、一、二枚のビルヴァの葉がのっているだけ――。それで、その葉に白檀香をふりかけてタクールに捧げた。それから、もう一度鐘をならして礼拝してから広間に行って坐った。

〔ダーナー部屋、タクールの部屋、苦行者(タパッシー)カーリーの部屋〕

僧院(マト)の兄弟たちは、自分たちのことをダーナーまたはダイニャ(訳註1)と呼んでいた。皆が集まる広間を〝ダーナー部屋〟と呼んでいた。そして瞑想したり勉強したりするのには南の端の部屋を使っていたが、カーリーが殆ど一日中戸を閉めて使っているので、僧院(マト)の兄弟たちはこの部屋のことを〝苦行者カーリーの部屋〟と呼んでいる。この苦行者カーリーの部屋の北にあるのがタクールの部屋である。その

（原典註）ある国にパドマという王とリーラーという妃が住んでいた。夫の不死を得ようと妃のリーラーはサラスワティー女神に祈った。すると、夫は肉体は死んでも、彼の魂は彼の部屋に留まるだろうとのお恵みをいただいた。王の死後、リーラーはサラスワティー女神に思いを集中した。すると女神は表れてリーラーに、世界は虚仮でブラフマンだけがただ一つの真実であることを教えてくれた。サラスワティー女神は、お前の夫パドマは、前生ではヴァシシュタという名のバラモンであった。彼はつい八日前に死んだのだった。そして今、彼の魂はこの部屋に留まっている。また他の地では、彼はヴィドゥラータ王として長い間国を治めていた。これはすべてマーヤーの力によるものである。時間や空間というものは、実は存在しないのだ。このあと彼は微細身でもってサラスワティーと連れだって、前述のバラモン・ヴァシシュタやヴィドゥラータ王の王国を訪れた。サラスワティーの助けによって彼の前生の記憶――ヴィドゥラータの記憶がよみがえってきた。彼は戦争で死んで、その魂がパドマ王の身体に入ったのだった。ヴィドゥラータ王は賤民(チャンダーラ)にはならなかった。しかし、ラヴァン王は賤民になった。手品師の手品によって、賤民(チャンダーラ)としての生涯の全てを一瞬のうちに経験したのだ。王の妃の中のアハリヤーという名の妃はインドラという名の若い男と恋に落ちた。

（訳註1）ダーナーまたはダイニャ――シヴァ神に仕える鬼の姿をした眷属(けんぞく)。

また北に供物を用意する部屋。この部屋に立って信者たちは献灯(アーラティ)を見まもり、タクールを礼拝するのである。この供養室の北が〝ダーナー部屋〟だ。とても長い部屋で、外から信者たちが来るとここに迎え入れるのである。このダーナー部屋の北に小さな部屋が一つある。食堂と呼んでいる。ここで信者たちが食事をするのである。

ダーナー部屋の東角に空き地があって、お祭りや催し物のあるときは、この空き地で食べたり飲んだりするのである。空き地の真北が台所。

タクールの部屋と苦行者カーリーの部屋の東側にベランダがある。ベランダの南西にバラナゴルの或る団体の図書室がある。この全室は二階にある。苦行者カーリーの部屋と図書室との間に、一階から二階に上がる階段がある。食堂の北に二階の屋上(やね)に上がる階段がある。ナレンドラはじめ僧院(マト)の兄弟たちは、夕方になると時々この階段から屋上に出た。そこに坐って彼らは、神に関する様々なことを議論するのだった。時にはタクール、聖ラーマクリシュナのことを話したり、また時にはシャンカラチャリヤや、またラーマーヌジャ、またイエス・キリストの話をする。ヒンドゥーの哲学やヨーロッパの哲学のこと、またヴェーダ、プラーナ、タントラの話もする。

ダーナー部屋でナレンドラは、そのすばらしい声で神々の名と栄光をたたえる歌をうたってきかせ、また、シャラトその他の兄弟たちに歌を教えた。カーリーは楽器を教わっていた。この部屋でナレンドラは、どれほど兄弟たちと楽しく称名讃歌(ハリナーム・キールタン)をして、また踊ったことか……。

〔ナレンドラと法（ダルマ）の伝道――瞑想（ディヤーナ）のヨーガと行動（カルマ）のヨーガ〕

ナレンドラはダーナー部屋に坐っている。信者たちも坐っている――チュニラル、校長、そして僧院（マト）の兄弟たち。法の宣布（伝道）のことに話がいった。

校長「（ナレンドラに）ヴィディヤサーガルは言っていましたよ――『私は鞭打（ムチ）たれるのが恐ろしいから、誰にも神の話はしない』と」

ナレンドラ「鞭打（ムチ）たれるのが怖い？」

校長「ヴィディヤサーガル先生がおっしゃったことですが――我々は死んだ後、みな神のところへ行くとする。ケーシャブ・センをも死の使いたちは神のところへ連れて行った。ケーシャブ・センはこの世にいる間、何がしかの罪を犯した。それが証明された時、神は多分、『この者を二十五回、鞭（ムチ）で打て！』とおっしゃるだろう。そのあとで私が連れて行かれる。私はよくケーシャブ・センの協会へ行った。私もさまざまの罪を犯した。そのために鞭打ちの命令が出される。その時私は、『ケーシャブ・センが私にこのように教えたので、私はこのような行為をしたのです』と言うかも知れない。すると神は、『ケーシャブ・センをもう一度連れて来い』とおっしゃる。そして彼にこうおっしゃる――『お前はこの者に法を説いたのか？　お前自身が神のことについて何一つ知らぬくせに、あつかましくも人に説法をしたのか？　それ、この者をもう一度二十五回打て！』（一同笑う）

だから、ヴィディヤサーガルはおっしゃるのです。私は自分の始末もできないでいるのに、その上、他人のために鞭打たれるなどと！（一同笑う）私は自分自身が神のことについて何も理解していない

のだ。それなのに他人に講義(レクチャー)するなどできることか?」

ナレンドラ「一つのことが理解できなかった人が、五つのことを理解したのはどうしてでしょうね?」

校長「五つのこととは、どういう意味ですか?」

ナレンドラ「一つのこと(神のこと)を知らない彼が、なぜ慈悲深く他者に奉仕することを知っていたのか、と言うのです。学校を建て、教育の仕事をしたのは何故ですか? 少年たちにとっては、学校で知識を身につけてから世間に出て結婚し、男の子や女の子の父親になるのが正しいことだということがわかっていたのは何故でしょう。(訳註――その当時まで、インドでは幼児婚、少年婚の風習があり、何の教育の知識もない少年たちが結婚生活に入っていた)

一つのことが正しくわかったら、すべてのことがわかるのです」

校長は内心で独り言――そういえばたしかに、タクールがよくおっしゃっていたっけ。神を知った人は全てのことを理解(さと)る、と。ヴィディヤサーガルが世俗の生活を送り、学校の仕事をしていることについて、こうもおっしゃった――〝あれはみな、ラジャス性から出てくることだ。彼の慈善行為はラジャス性のサットヴァだ。このラジャス性は悪くない〟と。

食事がすむと、僧院(マト)の兄弟たちは休息していた。モニとチュニラルは、供物室の東かたの室内階段の踊り場で、坐って話をしている。チュニラルは南神村(ドッキネーショル)に行って初めてタクールにお会いした時のことを話していた。彼は一度、世間がつくづく厭(イヤ)になって家を出、聖地をさまよい歩いたことがある。

その時分のことも話してくれた。しばらくするとナレンドラが来て、そばに坐りこんだ。ヨーガヴァシシュタの話のつづきになった。

ナレンドラ「（モニに）――ヴィドゥラータは賤民（チャンダーラ）になったんでしたかね？」

モニ「えっ？　ラヴァンのことですか？」

ナレンドラ「ああ！　そこまで読んでいらっしゃるんですね？」

モニ「ええ、ほんの少しですが……」

ナレンドラ「ここの本を読んでいらっしゃるのですか？」

モニ「いえ、自宅（いえ）でちょっと読んだのです」

ナレンドラは年少のゴパール（フトコ・ゴパール）にタバコを持ってくるようにと言った。年少のゴパールは瞑想をしていたのである。

ナレンドラ「（年少のゴパールに向かって）ほら、タバコの用意！　瞑想なんか何だ！　先ず第一に神や聖者のお世話をして（心の）準備をしろ。それから瞑想だ。先ずカルマ（仕事）、それから瞑想」（皆笑う）

僧院（マト）の建物の西の方に広い土地がある。そこには沢山の樹木が茂っている。校長が木の根元に一人で坐っているとプラサンナがやってきた。時間は午後三時ころ。

校長「この何日も、いったい何処へ行っていたの？　君のために皆がどんなに心配していたか――。それで、皆に会ったのかい？　いつ戻ってきたの？」

プラサンナ「今、帰ったのです。皆に会いました」
校長「君は、ブリンダーヴァンに行くという手紙を置いていったね！　私たちはとても心配していたんだよ！　いったい、どこまで行ったの？」
プラサンナ「コンナガルまで行きました」（二人笑う）
校長「坐りなさい。まあ、話をしてごらん。先ず最初に何処へ行ったんだね？」
プラサンナ「南神村（ドッキネーショル）のお寺に――。そこで一晩泊まりました」
校長「はっはっはっは。ハズラー先生はどんな様子でした？」
プラサンナ「ハズラーは、『私のことを、どう思うかい？』と言いました」（二人で笑う）
校長「アハハ……。で、君は、何と言ったの？」
プラサンナ「私は黙っていました」
校長「それから？」
プラサンナ「又、言いました――『私にタバコを持ってきてくれたのかね？』（二人で笑う）私に世話をさせようとしたんですよ！」（大笑い）
校長「それから何処へ行ったのですか？」
プラサンナ「だんだんコンナガルの方に歩いて行きました。或る場所で夜になってしまいました。もっと先へ行きたいと思い、西の方に行く汽車の切符のことで、品の良さそうな紳士たちに聞いてみました――『ここまで行くお金がいただけるでしょうか？』と」

校長「その人たちは何と言いました？」

プラサンナ「『ルピーかそこらなら出してやるが、そんな所まで行く汽車賃全部なんか、誰だって出す人はいないよ』と」（二人で笑う）

校長「それで、何を持っていったの？」

プラサンナ「腰衣（カポル）を一、二枚、それから大覚者様（パラマハンサ・デーヴァ）の写真と……。写真は誰にも見せませんでした」

〔父と息子との対話――どちらが先か？――父と母、神〕

シャシーの父親（訳註2）が来た。息子を僧院（マト）から家へ連れて帰ろうと思っているのだ。タクール、聖ラーマクリシュナのご病気中、約九ヶ月にわたってシャシーは誠心誠意看病をしていた。彼は大学で学士を取るまでに勉強していた。大学入学資格試験で奨学金（スカラーシップ）を受けてもいた。父親は貧しいバラモンであり熱心な修行者（サーダカ）である。シャシーは長男なのだ。両親の大いなる希望は、彼が無事学業を終えて金を稼ぎ、家の経済的困難を救ってくれることなのである。それなのにこの大切な息子は、神を悟るために世間のことを捨てたのである。彼はよく泣きながら友だちに話したものだった――「どうしたらいいか、ぼくには何もわからない。あーあ！　父や母に何一つ親孝行らしいこともしてあげられないんだ

（訳註2）シャシーの父親は非常に厳格な修行者でプージャをするにも規則正しく手順をきっちりと守る人であった。後になってシャシーのことを理解するようになり、さらにはベルール僧院（マト）でプージャの手伝いをするまでになった。

よ！　二人は、どんなにぼくのことを期待していたことか！　貧しいものだから、母は装身具(アクセサリー)一つ持っていないんだ。母に宝石飾りを一つ買ってあげたいと、ぼくはどんなに思っていたことか！　何もできなかったよ！　でも、家にはとても戻れないよ！　だってグル・マハーラージ（タクールのこと）が、〝女と金を捨てろ〟とおっしゃるからね。もう二度と戻れない！」

タクール、聖ラーマクリシュナが昇天された後、シャシーの父親は考えた――こんどは家に帰ってくるだろうと。しかし、息子は数日を家で過ごした後、僧院(マト)ができるとすぐ足繁く通いはじめ、何日か経つとそこに住み込んでしまって、家に帰らなくなった。そのため、父親は度々僧院(マト)へ来ては家に連れて帰ろうとした。しかしシャシーは決して帰ろうとしない。今日も父親が来たことを知って、彼は別の戸口から逃げ出して、会おうとしないのである。

父親は校長を知っている。校長といっしょに二階のベランダをぶらぶら歩きながら話し合っていた。

父親「ここの主(あるじ)は誰ですか？　あのナレンドラが原因で、何もかもダメになってしまうんです！　みんな一度はちゃんと家に帰っていたのに……。また勉強に戻っていたのにねえ」

校長「ここには主(あるじ)などいません。皆、対等なのです。ナレンドラが何をするとおっしゃるのですか？　自分が来たくなかったら来るもんですか。私たちは家を捨ててまで来ることが出来たでしょうか？」

父親「あなたはとても、よくやっていらっしゃる――両方をうまく調和させて。あなた方のやり方で宗教(ダルマ)が実践できないもんですかねえ？　それこそ私どもの希望なのですよ。ここにもいて、また、あちらにも行く。考えてみて下さい。あれの母親がどんなに泣いているか――」

校長は胸が重くなって黙っていた。

父親「それに、サードゥを探すのにずい分歩き回ったりして！　私はとても良いサードゥを知っているから、そこへ連れて行くこともできるのです。インドラナーラーヤナのところにサードゥが一人来ていて――非常にすぐれた人です。あのサードゥに会ってみるといいんだが……」

〔ラカールの離欲（ヴァイラーギャ）――サンニヤーシンと女〕

ラカールと校長が苦行者カーリーの部屋の東かたにあるベランダでぶらぶら歩いている。タクールや信者たちのことをいろいろ話していた。

ラカール「（熱心に）校長先生（マスタル・マハーシャイ）、皆で修行をしましょう！

もう二度と家には戻りません。誰かが、『神を悟れないのに大さわぎしたって、どうにもならない』などと言おうものなら、ナレンドラは実にいい返事をするんですよ――『ラーマ（神）が得られないからって、シャーマ（女）といっしょに暮らさなければいけないのか！　そして子供の父親にならなけりゃいけないのか！』って。ああ！　ナレンドラは一つ一つ実に適切なことを言いますねえ！　あなたも何なりと、彼にお尋ねになるといい」

校長「本当です。ラカールさん（バーブ）。君も見たところ、求道心に燃えているようですね」

ラカール「校長先生、どう言えばいいんですか……。昼頃にナルマダーに行きたくてたまらなくなったんですよ！　ね、校長先生（マスタル・マハーシャイ）、修行して下さい。修行しなけりゃ何ごとも成就しませんよ。ごらん

なさい、シュカデーヴァでさえ世間を恐れました。だから、生まれるとすぐ逃げ出したでしょう！お父さんのヴィヤーサ・デーヴァは、『ちょっと待て』と言ったのに待たなかった！」(訳註、ナルマダー――インド中央部アマルカンタク高原を源に西に向かってアラビア海に注ぐインド第二の大河で、ガンジス河と並ぶ聖なる河)

校長「ヨーガ奥義書(ウパニシャッド)にある話ですね。マーヤーの支配下(くに)からシュカデーヴァは逃げ出しました。そう、ヴィヤーサとシュカデーヴァのとてもいい対話もありますよ。ヴィヤーサは、〝世間にいて法(ダルマ)を行え〟とすすめたらシュカデーヴァは、〝最も大切なものはハリの蓮華の御足です！〟と答えた。それから、世間の人たちが結婚して女といっしょに住んでいることに対して、嫌悪の情を表わしています」

ラカール「多くの人たちは、女の人を見さえしなければそれでいいんだと思っています。女の姿を見かけたら目を地面に向ける、そんなことをしただけで、いったい何になるんですか？　昨夜(ゆうべ)ナレンドラが、実にうまいことを言いました。『自分に色欲がある間だけ、女性というものが存在する。それが無くなったら、女と男の相違感(ちがい)は消滅する』と」

校長「全くその通りだ。子供たちは男女の違いを感じていない」

ラカール「だから言うんですよ。我々は修行をするべきだと――。マーヤーを乗り超えない限り、どうしても神の智識は身につかない。――広間に行きましょうよ、バラナゴルからお客が来ていますから。ナレンドラがあの紳士たちに何を話しているか、聞きに行きましょう」

〔ナレンドラと全託(シャラナーガタ)〕

ナレンドラが話をしている。校長はだが、広間の中には入らなかった。東側の廊下を行きつ戻りつしていると、ところどころ聞きとることができた。

ナレンドラが言う――「夕拝（サンディヤー）などの行事には定まった時間はありません」

一紳士「それで先生、修行さえすればあの御方を悟ることができますか？」

ナレンドラ「それはあの御方の恩寵によるのです。ギーターの中でクリシュナは言っておられます――

神は全ての生き物（ブータ）の胸に宿り
マーヤーによって全ての生き物を機械の上に乗せられたように回転せしめる
故にバーラタ（アルジュナ）よ、心をつくして彼に庇護を求めよ
彼（か）の恩寵により汝は無上の平安と永遠の住み家を得るべし

――ギーター 18・61～62――

あの御方の恩寵がなかったら、修行も供養も何の足しにもなりません。だから、あの御方に全てを託すことがだいじなのです」

一紳士「私どもが時々此処へ来ても差支えありませんか」

ナレンドラ「どうぞ、いつでもお越し下さい。あなたがたのガートで、私どもはガンガー沐浴をし

ているのです」

紳士「それは一向にかまいません。だが、あなた方以外の人たちはあそこには来ないようにして下さい」

ナレンドラ「そういうことでしたら、私どもは行きますまい」

紳士「いえ、そういう意味ではありませんが――しかし、あなた方が来ているのを見て他の人も来るようでしたら、あなた方もいらっしゃらないでいただけますか」

〔献灯(アーラティ)とナレンドラのグル・ギーター朗読〕

日が暮れて夕拝が行われた。信者たちはいつものように、〝ジャヤ・シヴァ・オームカーラ〟を声をそろえて唱えながら神に祈った。献灯(アーラティ)を終えると一同はダーナー部屋に行って坐った。校長も坐っている。プラサンナがグル・ギーターを読んで聞かせはじめた。ナレンドラが入って来て、自己流の節回しをつけながら朗詠する――

至福のブラフマン、無上の喜楽(よろこび)、純粋清浄なる智慧の権化
対立を超えて空に同(ひと)しき　根本原理なる師に
常に全てのものを照覧し給う清浄永遠なる一者
想念を超え三性(トリグナ)を超えて住し給う師に南無し奉る

また、ナレンドラは歌う――

師(グル)より良いものはない、師(グル)より高いものはない
これはシヴァの勅言(おことば)、シヴァの決めたこと
無上にめでたきブラフマンである師(グル)を称えよう
無上にめでたきブラフマンである師(グル)を拝もう
無上にめでたきブラフマンである師(グル)を瞑想しよう
無上にめでたきブラフマンである師(グル)を南無しよう

ナレンドラは節をつけてグル・ギーターを朗詠すると、信者たちの心は風のない場所にあるローソクの炎のように落ち着いた。まことに、タクールもよくおっしゃったものだ――〝甘美な笛(リュート)の音色を聞くと、ヘビが鎌首をもたげてジーッとしているようになる〟と。ナレンドラが歌えば、胸の中にいますあの御方も、そんなふうになって聞いていらっしゃるのだ。ああ！　僧院(マト)の兄弟たちはどんなふうにグルを――聖ラーマクリシュナを信愛していることか！

〔タクール、聖ラーマクリシュナの愛情とラカール〕

苦行者カーリーの部屋にラカールは坐っている。傍にプラサンナ、校長もその部屋にいる。

ラカールは子供と妻を捨ててここへ来ているのだ。胸に強烈な離欲の念が燃えさかっている彼は、独りでナルマダーの岸か、ほかの聖地へ行きたいと思っている。でも彼は、プラサンナを説得している。

ラカール「(プラサンナへ) ここを逃げ出して、いったい何処へ行くんだ? 修道者(サードゥ)との交流を捨ててどこに行くというのか? ナレンドラのような人物といっしょにいられるんだよ。ここを出て、どこへ行く気なんだい?」

プラサンナ「カルカッタには父と母がいます。両親の愛情に引きずられるのではないかと、私は恐れているんです。それで逃げたかったのです」

ラカール「師上人(グル・マハーラージ)(ラーマクリシュナ) が可愛がって下さった程に、両親は私たちを可愛がってくれるかい? これ程の愛情に対して、我々がいったい何をしたというのか。なぜあのかたは、我々の身と心と魂の真実の幸せのために、あんなに夢中になっていらっしゃったのか。我々はそれに対して、何かしたというのか!」

校長は心中に思う——ああ、ラカールの言うことは本当だ! だから、あのかたのことを〝無辺の慈悲海〟とお呼びするのだ……。

プラサンナ「じゃ、君はどこかへ行きたいという気は起こらないの?」

ラカール「ナルマダーの岸へ行って、何日かいたいという気がすることもあるよ。そのような場所のどこかの庭園に行って何か修行をしたいものだと、時々思うんだ。三日のパンチャタパ(訳註3)をしたいと考えたりもする。でも、俗人の持つ別荘や庭園などに行く気は、もう二度と起こらないよ」

〔神は存在するか？〕

ダーナー部屋でターラクとプラサンナが話をしている。ターラクは既に母親を亡くしていた。父親はラカールの父親と同じく、再婚をしている。ターラクも結婚したのだが、妻は死んだ。今ではこの僧院（マト）こそがターラクの住み家である。ターラクもプラサンナを説得している。

プラサンナ「私は智識（ジュニャーナ）もない、神に対する愛（プレーマ）も持っていない。いったい何を頼りに生きていけばいいんだろうね？」

ターラク「智識を得るためには、たしかに相当の力がいるけれど――なぜプレーマを持っていないなんて言うんだい？」

プラサンナ「神を慕って泣いたこともないんですよ。なのに、プレーマを持ってるなんてなぜ言える？　こんなに時間が経ったのに、いったい何を得たと言うのか？」

ターラク「どうして？　君は大覚者（パラマハンサ）にお会いしたじゃないか。それなのになぜ、智識がないなどと言うんだ？」

プラサンナ「どんな智識のこと？　智識とは――〝知る〟ということでしょう？　私は何を悟った？　神が存在するかどうかさえ、私にはハッキリわからないんだよ」

ターラク「うん、そりゃそうだ。大体、智識人（ジュニャーニー）は、〝神は存在しない〟という意見なんだから――」

（訳註3）パンチャタパ――夏、炎天下で四つの火に囲まれながら称名し、瞑想する修行。

校長は心中で独り言――アー、タクールがよくおっしゃったっけ――〝神を求める人々は、いまのプラサンナのような境地を通過するものだ〟と。〝神があるかないかさえ疑わしい気持ちになるものだ〟と。ターラクはいま仏教哲学を勉強していると聞いたが、だから、智者は神を認めないと言うんだろう。でも、タクールはおっしゃった。〝智者も信仰者も一つの同じ地点に到達する〟と」

## 僧院(マト)の兄弟たちと過ごすナレンドラ――ナレンドラの胸中

瞑想室、すなわち苦行者カーリーの部屋でナレンドラとプラサンナが話をしている。同じ部屋の離れた場所にラカールとハリシュと年少のゴパールがいる。しばらくすると、年長の方のゴパールさんが入ってきた。

ナレンドラがギーターを朗読してプラサンナに聞かせている。

――クリシュナがアルジュナ(バーラタとも呼ばれる)に説教している詩句(ことば)――

神は全ての生き物(ブータ)の胸に宿り
マーヤーによって全ての生き物を機械の上に乗せられたように回転せしめる
故にバーラタ(アルジュナ)よ、心をつくして彼に庇護を求めよ
彼(か)の恩寵により汝は無上の平安と永遠の住み家を得るべし(ギーター18・61〜62)
すべての法規(ダルマ)より離れて我にのみ心身を寄せよ

我は汝をあらゆる罪から解放する、悲しむなかれ（ギーター 18・66）

ナレンドラ「わかるか？〝機械の上に乗せられて〟の意味が。マーヤーによって神は、全ての生き物をまるで機械の上に乗せられたように回転させる。君は、〝神を知りたい〟と思っている。君はね、虫より小さい虫の一匹に過ぎないんだよ。その君が、〝神を知ろう〟というのかい！　一度よく考えてみ給え。人間とはいったい何か！　あの数えきれない星を見てごらん。聞けば、あの一つ一つが太陽系なんだそうだ。ぼくらにとっては、たった一つの太陽系さえどうしようもなく大き過ぎるんだ。地球なんか太陽に較べたら、小っちゃなおはじきの玉みたいなものさ。その地球の表面に、人間というものが虫みたいに歩き回っているんだよ！」

ナレンドラは歌った――

〔あなたが父、私たちは子ども〕

大地の塵（ちり）に生まれきて
大地の塵に目は盲（めし）い
塵をつかんでたわむれる
幼児の如きわれらをば

1887年5月8日(日)

父よ、庇(かば)いて救いたまえ
一たび犯せしあやまちに
ひざの上よりおしのけて
遠ざけ放ちたまうなら
二度とわれらは起(た)ち得ずに
大地の表(うえ)を這いずりて
この生涯は無明(やみ)のなか

父なる神よ、われらは赤子
一歩(ひとあし)ごとにつまずき転ぶ
まことに小さく幼き精神(こころ)
恐(こわ)きルドラ(シヴァ)の面はずし
やさしき顔を向けさせたまえ
幼きわれらのあやまちを
やさしく訓(おし)え話したまえ
百度も足をふみ外し
百度も転ぶ塵の中

頼りなき子をねがわくは
父よ、護りて導きたまえ

「明け渡せ！　あの御方の足もとに、身心を明け渡してしまえ！」
ナレンドラは恍惚となって再びうたい出した。

〔方法――明け渡し〕

主よ、私は下僕、私は下僕、私は下僕
あなたは主、あなたは主、あなたは主
二枚のパンと一枚の腰布をあなたは私に下さった
あなたの名を唱えば、胸に熱き愛、湧き上がり
主よ、慈悲深き名を、私はくりかえす
下僕カビールはあなたの足下に身を投げ出し
主の慈悲深き名を絶えずくりかえす

「彼のお言葉を憶えていないか？　神は砂糖の山なんだ。君はアリなんだ。たった一粒で胃袋はいっ

ぱいになるんだよ！　なのに君は、砂糖の山全体を家に持って帰るつもりでいるのさ！　あのかたのおっしゃったこと、憶えていないのかい？　シュカデーヴァでさえ、大きくはあるが蟻の一匹にすぎないって。だから僕は、カーリーに言ったんだよ――『バカだなあ、自分の物差しで神を計るつもりなのか』って。

神は慈悲の大海だ。あの御方に身をよせて護ってもらえ。お恵みを下さるよ！　あの御方にお祈りしろ――

和顔を向け給いて、常に我を護り給え
非実在から実在へ、暗黒から光明へ
死より不死へと、導き給え
生々世々（しょうじょうせせ）、限りなく在（おわ）しまして
ルドラ（シヴァ）よ、やさしき顔を向けて
永遠にわれを護り導き給え」

プラサンナ「どんな修行をしたらいいんですか？」

ナレンドラ「ただ、あの御方の名をとなえろ。タクールがよくおうたいになった歌、おぼえているかい？」

〔方法――彼の御名〕

(一)おおシャーマ、あなたの名をただ信じているだけ
コーシャクシも説教も　私にとっては用がない
あなたの御名で死の鎖も切れるとは
大神シヴァが宣言なさったこと――
しかも私はそのシヴァさまの召使いだから
他の誰の言葉にも従わない
何が来ようと御名をくりかえし
死ぬことなどは考えてみもしない
ただシヴァの言葉をしっかりつかんでいるだけ

(二)父なる神よ、われらは赤子
一歩ごとにつまずき転ぶ
まことに小さく幼き精神
……（前述参照）

コーシャクシ――匙のような礼拝用具

〔神は実在するか？　神は慈悲深いか？〕

プラサンナ「あなたは、〝神は存在する〟と言っている。そして、〝唯物論者はじめ多くの思想家は、この世界は自然にできたものだと言っている〟と話して聞かせるのもあなたなんですよ」

ナレンドラ「化学（ケミストリー）を勉強しなかったのかい？　さて、いったい原素の結合は誰がするんでしょうね？　水をつくるために酸素、水素、そして電子を結びつけるのは、一個の人間的な手だ。

知性ある力は誰でもが認めている。智慧そのものである一つの力が、これらすべてのことを現象させているんだよ」

プラサンナ「神は慈悲深い、ということはどうしてわかるのでしょう？」

ナレンドラ「〝あなたの慈悲深いお顔によって（ヤッテー　ドッキシナム　ムカム）〟と、ヴェーダで言っている。

ジョン・スチュアート・ミルも同じことを言っているよ。『人間の中に慈悲というものを授けられた御方のなかに、どれほどの慈悲があるのか見当もつかない！』とミルは言っている。タクールはよくおっしゃった――〝信念が一番大切だ〟と。あの御方はごく近くにいらっしゃるんだよ！　固い信念があってこそ成功するんだ！」

こう言って、ナレンドラは再び美しい声で歌う――

〔方法は――信念をもつこと〕

何処を探しているのか――
わたしはお前のすぐそばにいるのに
あちこち探しまわってもだめ
わたしは皮膚の中にも髪の中にも
骨の中にも肉の中にもいないよ
寺にも回教寺院にもわたしはいない
ベナレスやカイラスに行ってもいない
アヨーディヤ、ドゥワラカでも見つからない
でも、信仰のあるところではわたしに会えるよ
勤行やヨーガ、離欲、出家のなかにもいないが
もし心をつくして探せば、すぐわたしに会えるよ

〔欲望がある限り神を信じることはできない〕

プラサンナ「あなたは時には〝至聖はない〟と言う。そうかと思えば、今のようなことを言う。いったいどっちなんですか？　意見を変えてばかりいて……」（皆笑う）

ナレンドラ「じゃ、この言葉はもう二度と変えない――欲望や願望を持っているかぎり、神を完全に信ずることはできない。人は一つや二つ持ってるものさ。例えば、勉強したいとか、試験にパスしたいとか、学者になりたいとか――こういう欲望を何かかにか持っているだろう」

ナレンドラは信仰心(バクティ)で声をつまらせながら、また歌をうたった。――神は慈悲深き護り手、無上の父母――

栄光(はえ)あれ、わが神(デーヴァ)　栄光(はえ)あれ、わが神(デーヴァ)
まことの幸福(さち)を賜(くだ)さる御方
悲苦と恐怖を滅す御方
宇宙世界を支える御方

思惟(おもい)を超えて限界(かぎり)なく
較べるものとて無き御方
宇宙の主(あるじ)、一切処に遍在(あまね)き
栄光(はえ)あれ、大霊(パラマートマン)　至上我なる神よ

栄光(はえ)あれ、わが神(デーヴァ)　慈悲深き世界の友

主よ、御足下にひれ伏し拝みまつる
無上の避難所、生死の軛を外す御方
栄光あれ、わが神　栄光あれ　わが神

われら　他に何も希まず　おお、わが主よ
ひれ伏して、ただただ願いたてまつる
この世において美徳を養い
来世はますます強く成長することを

栄光あれ、わが神　栄光あれ、わが神

ナレンドラはまた歌った。兄弟たちが、ハリの甘露のコップから十分に飲むようにと言って――。神はごく近くに在す――ジャコウ鹿とジャコウ袋の間ほどに。

ハリの甘露の美酒飲んで
さあさ、酔おうよ、ホ、ホ、ホゥ！
子供の時代には遊びに呆け

青壮年の時代は女に敷かれ
老いてはボンヤリ気力もなくて
火葬場行きの車を待っている

へその真ん中に香袋があるのを
どうしてジャコウ鹿に知らせたらいいか
正しい師匠に道も訊かずに
盲のままでこの世の森を
人は鹿のようにさまよい歩く

校長はベランダの上で以上の一部始終を聞いていた。やがて、ナレンドラは立ち上がった。部屋から出て行くとき、彼は言った。「頭が熱くなったよ、しゃべり過ぎて……」ベランダで校長に会うと――「校長先生、水をちゃんと飲んで下さいよ」

僧院の兄弟の一人がナレンドラに言った――「そしてこんどは、〝神は存在しない〟と言うつもりなんでしょう!」ナレンドラは笑い出した。